

## からだとは・病とは(41) 病気も生きている 鈴木齊観<sup>せいかん</sup> (齊観堂治療院院長)

毎月、鍼道研修会を開いている。5月には「病気も生きている」(横田観風著『万病一風論の提唱』)を取り上げた。

著者は24歳の時に突然の心臓発作で意識を失った。救急車で病院に運ばれ、一命をとりとめた。3日後に意識が回復した。重度の心臓肥大であり、その後も発作を繰り返した。縁あって灸治療を受け始めた。1年後から目まいや頭痛・嘔吐が起こるようになった。3年目にドロっとした黄色い塊を吐き、その後は重い心臓発作が起こらなくなった。病院で検査すると、心臓肥大が治っていることが分かった。しかし今度は激しい視覚異常の発作が嘔吐や頭痛と伴に起こるようになった。・・

著者はこう書いている。

私は、発作で苦しい病床にある時、めまぐるしく変転してゆく状態を観察する中で、生命活動の不思議を体験、自覚していった。その一つに、「病気も生きている」という実感を持ったことがあげられる。

西洋医学的な常識に染まっている現代人は病気を臓器単位でしか見られない。それは医師でも同じで、心臓病と眼病と別々の病気として見られ、心臓や眼に異常が発見されなければ、自律神経失調症と名付けられる。心臓にあった水毒が灸治療によって排出を促され、それが嘔吐という反応になったことなど思い至らない。そして心臓から排出されてもまだお腹に残る水毒があって、その水毒そのものや、そこから発せられる邪気が視覚異常の発作を起したとはとても想像できない。しかし東洋医学的に見れば、病気が変化しただけに過ぎないわけで、逆に別々の病気と見られることが不思議である。

その研修会のすぐ後に「病気も生きている」の例として分かりやすい臨床を体験した。

冷え症で自称・不妊症の女性が妊娠して喜んでいたが、9月目の第3週頃にからだが揺れる様な目まいとそれに伴う難聴・嘔気の発作が起こるようになって、久し振りに来院した。

2・3回治療し、2週間程でほぼ収まってやれやれと思ったところで、今度は同じ左側の顔面麻痺となった。病院では目まいとは「関係ない」と言われ、経過観察ということでビタミン剤のみを処方されていた。更に週2・3回の治療を2週間続け、予定日2週間前にはほぼ治癒した。結局病院でステロイドなど処方されずに済み、患者は喜んでいた。そして予定日より4日早く自然分娩にて無事出産した。

この女性の場合は、目まいも顔面麻痺も同じ左側の耳周囲の問題であり、局所的には概ね同じだが、病院では「関係ない」と言われているのが不思議であった。確かに目まいは内耳、顔面麻痺は顔面神経であるから、厳密には局所は違う。耳周辺に邪気を感じた。先ず最初、それが内耳に影響して目まいを起し、次に顔面神経に影響して顔面麻痺となったと理解できる。邪気という捉え方ができなければ、内耳と顔面神経はつながらない。

目まいが起こる様になったのは、妊娠末期でお腹が大きくなり、下肢からの静脈の流れを圧迫し、下肢がむくむようになった時期であった。元々お腹にあった水毒がこれによって影響され、左耳周辺に上って来た。そして水毒は内耳(液体で満たされている)に入って目まいを起した。更に水毒やそこから発せられる邪気は、徐々にその周辺の筋肉や顔面神経を侵したのだろう。

こういう様に病気を見てみると、西洋医学と東洋医学での捉え方の違いがよく分かると思う。(2008年7月大暑)